

【研修報告】

American Society for Bioethics and Humanities Annual Meeting October 15-18, 2009 Washington, DC

山口 三重子*

はじめに

American Society for Bioethics and Humanities – ASBH (全米生命倫理・人文学会) は、1998年1月、3つの学会 (The Society for Health and Human Values (SHHV健康と人間の価値学会), The Society for Bioethics Consultation (SBC生命倫理コンサルテーション協会), The American Association of Bioethics (AAB 米国生命倫理学会)) が合同して設立した学会である。私が最初にこの学会に参加したのは、2006年にコロラド州デンバーで開催された第8回年次大会で、約700名以上の参加があった。日本からの参加は東大(当時)の稲葉一人先生(異文化の倫理コンサルテーションについての発表)のグループと私たちのグループの二組であったと記憶している。看護関係者の参加が非常に多いとの印象があったので、翌年の2007年の学会(ワシントンDCで開催)では、私たちのグループも3題(Treatment of Severely Handicapped Newborns in Japan: Differences in the Perspectives of the Different Pediatric and Obstetric Medical Specialties, Treatment of Severely Handicapped Newborns in Japan: Ethical Dilemmas Experienced by Physicians with the Parents, Treatment of Severely Handicapped Newborns in Japan: Ethical Dilemmas and the Law)が採択され、発表することができた。

今回の学会もワシントンDCで開催され、私にとっては3度目の学会参加であり、再び研究成果(How Physicians Deal with the Ethical Problems in Japanese Centers for Maternal, Fetal, and Neonatal Medicine)が採択され、発表した。本稿ではこの学会での発表経過とコロンビア大学での小児科医とのディスカッション&NICU見学を行ったのでその報告を行う。

1. 学会の様子

2009年に開催された第11回ASBH年次大会のテーマは“Translating Bioethics and Humanities (生命倫理と人文科学を説明する)”で、約1300人の参加があり、第8回大会より2倍の参加で生命倫理に対する関心の高さが伺えた。私が参加したセッションの一つは、私が研究テーマとしている「周産期の生命倫理」であった。このセッションでは専門的治療を選択する時、インフォームド・コンセントの障壁、治療結果のばらつきや障害の差異があり、問題の解決を非常に困難としているが、問題解決に向けて熱心にディスカッションされていた。

また、中央アフリカの研究者の報告は、印象的というより悲しい現実の報告であった。アフリカ自体が衛生に関する関心も低いことによって、未だに平均寿命は40歳と短く、役人へのワイロによって欧米から入荷された薬を一般の人に分け与えられなかったり、逆に、欧米からの寄付の薬品も期限切れすれすれであったり、期限が切れていたり、中には期限が切れたものも売りつけるということであった。

生命倫理・医療倫理に関するルールが明確な欧米での報告を聞き、学びと刺激の大会の参加であった。



写真1. 学会風景

* 岡山県立大学 保健福祉学部看護学科

2. 筆者の発表内容

私たちの報告内容は、全国に61か所（2007年）ある総合周産期母子医療センターの責任者である医師を対象に行った調査で、センターで生じた倫理問題への対応を問うものであった。22名（回収率36.1%）からの回答があり、各設問に対する回答について、次に示す内容を報告した。

倫理問題が生じたときの対処は、ルール化されているところは3施設のみで、19施設にはルールがなかった。ルールがあると回答した施設では、センター全員の出席によるカンファレンスの開催、そのガイドとして「重篤な疾患を持つ新生児の家族と医療スタッフの話し合いのガイドライン」の利用、倫理委員会への報告等がされていた。

臨床で生じた倫理問題をマネジメントする部署については「倫理委員会」が13施設、「医療安全対策部」が1施設、残りの施設は無回答で、米国のような病院倫理委員会や倫理コンサルテーション機能を持っていないという状況が伺えた。しかし、2007年にコンサルテーションを必要とするような事例があった施設は9施設で、「重度脳内出血児の治療方針」「(18トリソミー+複雑心奇形+食道閉鎖症+小脳低形成+超低出生体重児)の治療方針」「致死的でない染色体異常のある児の治療方針」「重度新生児仮死に対する両親からの治療中止の希望」「エホバの証人の両親から生まれた在胎31週、988gで出生、髄膜瘤のある新生児の輸血拒否」など深刻な倫理問題に関する事例の報告を行ったが、日本で生じている新生児に関する倫理問題の報告は皆無であり、多くの方々からの関心を集めた。

ポスター発表は学会初日にあり、日本からは新潟大学の宮坂道夫先生（医療倫理学）が“Three Fundamental Elements of Narrative Approach to Bioethics: Normativity, Narrativity, and Social Constructivity”を報告され、同じフロアで数少な



写真2. 共同研究者とポスターの前で

い日本人として意見交換を行った。

3. コロンビア大学での新生児科医とのディスカッション及びNICUの見学

コロンビア大学のNICUに勤務する医師および看護師とディスカッションができるように取り計らってくれたのは小児科学で臨床倫理を専門とするKristina Orfali先生（Columbia University Department of Pediatrics）で、ASBHの学会での出会いが最初であった。

ディスカッションのためにポスターの作成、場の設定等々の準備をしてくださり、言葉で表せないほどの感謝をしている。

このディスカッションでは、日本での親による新生児の治療拒否の現状や治療選択時に起こる倫理的な問題について、調査結果を報告すると同時に、アメリカでの状況についての報告を受けた。アメリカ



写真3. 小児病院入口

NSCHONYP/NEONATOLOGY

**RESEARCH
CONFERENCE**

A Study on The Need for Ethical
Guidelines on Severely
Handicapped Neonates in Japan

Guest Speakers

Mieko Yamaguchi, PhD, RN
Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

Michele Shimizu, PhD, MA, RPT
Konan's Women's University

WEDNESDAY, OCTOBER 14, 2009
11:50 AM
L. S. Stanley James Conference
Tower 7—Room 778

ポスター

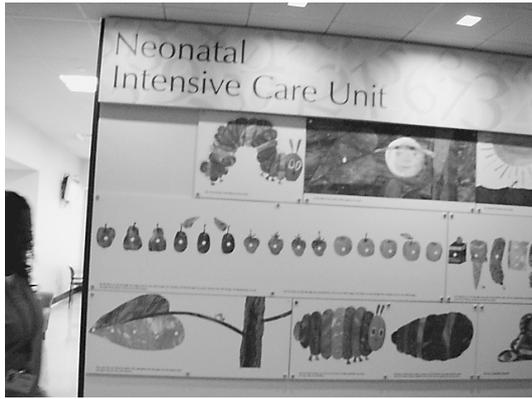


写真4. NICU入口

も日本と同様に治療拒否があるが、様々な職種の方からのサポートや家族と医療者間のコミュニケーションを深め、説明の機会を何回も持つということだった。また、重症な子どもの場合、治療の効果が無い時などは何度も話し合い、結果として両親の腕の中で看取る場合もあるという。日本での状況とは異なる点もあるが、米国ではシステムとしてスムーズに機能していると感じた。

NICUの見学時は日本の患児が入院していたが、もうすぐ退院と聞いて安心した。偶然母親が来られており、話を伺うことができた。やはり、治療方針は日本と違っており、セカンドオピニオンとして日本の医師に意見を求めたとのことであった。

おわりに

重症障害新生児の治療決定の特質として、親による代理決定があり、多くは適切な治療選択がなされるが、時に患児の最善の利益と一致しているとは言い難い治療拒否や非常に重症な子どもに医学的に無益な治療の実施が継続的に行われることもある。このような状況から生じる医学的・倫理的・法的問題について、筆者は20年来の関心を寄せ研究を続けてきた。国内で起こっている現状の調査を行いながら、諸外国での実情を知りたいと思いつつ、なかなか知る機会がなかったが、2006年に偶然にASBHの学会に参加して以来、そこでの発表の機会も得て、多くの研究者仲間が増え、さらに研究の輪が広がっている。

ASBHの学会は、常にメジャーなホテルで開催され、早朝から多くの学習会が開催されており興味深く刺激一杯の毎日であった。

謝 辞

本学会の参加とコロンビア大学の訪問は、日本赤十字広島看護大学より海外出張旅費助成を受けて行いました。このような貴重な機会を与えていただきましたことを心から感謝申し上げます。

文 献

ASBH Home Page (2011現在) <http://www.asbh.org/>
ASBH Annual Meeting Program Book (2009)